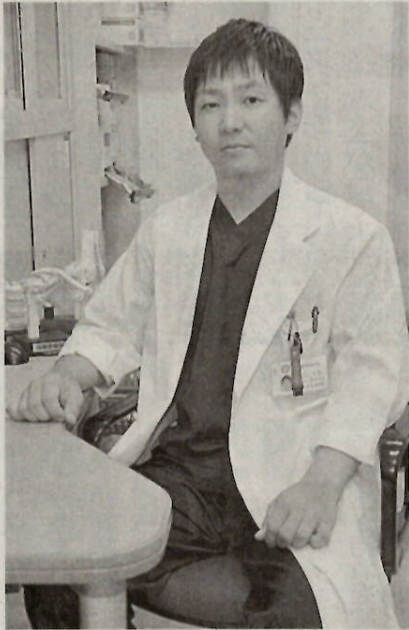


県済生会病院整形外科医長 堀江亮佑氏

香川の医療最前線

360



◆ほりえ・りょうすけ 2007年香川大医学部卒。同大付属病院、兵庫県立淡路病院(現・県立淡路医療センター)、りつりん病院などを経て、17年から現職。医学博士、日本整形外科学会専門医。大阪府河内長野市出身。35歳。

人体の多くの関節の中で最も自由度の高い肩関節。物を持ち上げる、ボールを投げる、手を挙げる、鉄棒にぶら下がるなどの動きは全て肩関節やその周辺の腱、筋肉が正常に機能してこそ可能だが、高齢化などに伴う腱板断裂や変形性肩関節症などで、激しい痛みを感じるなどして、腕を自在に動かせないケースも多い。県済生会病院整形外科の堀江亮佑医長に治療方法などについて聞いた。

—肩関節の疾患で多いものは。
腱板断裂が全体の約7割で圧倒的に多数を占めている。上腕骨を取り囲むように棘上筋、棘下筋、肩甲下筋、小円筋の四つの筋肉があり、この四つを総称して腱板と呼ぶ。腱板は肩峰と上腕骨に挟まれているため、摩擦を受けやすい。このため腱板断裂は高齢者

はもちろん、野球やバレーボールなどのような「オーバーヘッドスポーツ」の選手にも起こることがあり、可動時痛や可動域制限を生じることが多い。しかし、断裂があっても全く痛みを感じないケースもある。痛みのメカニズムはまだ解明されていない。

肩関節疾患治療

腱板修復や人工関節

手術で痛みのない生活も

—このほかに、高齢者に多い症例は。
変形性肩関節症が挙げられる。膝や股関節と同様、加齢に伴って軟骨が摩耗し、

に縫着する。全身麻酔で行っており、術後は4〜6週間の装具による固定が必要。基本的に固定期間は入院してもらっている。

—どのようにつに治療するか。
鏡視下腱板修復術といって肩に直径1cm程度の穴を数カ所開け、内視鏡(カメラ)を挿入して手術を行う。上腕骨に糸が付いたアンカを数個打ち込んで、切れ目なく、肩の動きが大幅に制限され、生活に支障が出ることも多い。当病院では年間に約20件の人工肩関節置換術を行っている。

—どのような手術か。
上腕骨と受け皿である肩甲骨の骨同士が直接こすれ合うようになる。痛みがあるだけでなく、肩の動きが大幅に制限され、生活に支障が出ることも多い。当病院では年間に約20件の人工肩関節置換術を行っている。



—この術式のメリットは。
肩甲骨側にボールを設置することで腕の回旋の中心が通常よりも内側かつ下側になる。三角筋のレバーアーム(この原理で支点から作用点までの長さ)が長くなり、筋肉の力が腕に伝わりやすくなる。これにより腱板がなくても三角筋の力で腕を挙げられるようになる。あくまでも最終手段であり、痛みが取れ、日常生活への大きな支障は解消されるが、真上まで手が挙がったり、スポーツができたなど、元通りまで回復できるものではないことを理解していただきたい。

■ 県済生会病院整形外科

肩関節については年間約180件の治療に当たっている。整形外科医は5人。

住 所：高松市多肥上町1331-1

電 話：087 (868) 1551

<http://www.saiseikai-kagawa.jp/>